

第 74 回 SGRA フォーラム

第 9 回日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性

「東アジアの『国史』と東南アジア」

日時：2024 年 8 月 10 日（土）～12 日（月）（到着日 8 月 9 日／解散日 8 月 12 日、出発日 8 月 13 日）

会場：チュラーロンコーン大学（タイ国バンコク市）及びオンライン（Zoom ウェビナー）

主催：日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性実行委員会

共催：渥美国際交流財団関口グローバル研究会（SGRA）

助成：東京倶楽部（申請予定）

■ 開催経緯

「国史たちの対話」企画は、自国の歴史を専門とする各国の研究者たちの対話・交流を目的として 2016 年に始まり、これまでに 8 回開催した。国境を越えて多くの参加者が集い、各国の国史の現状と課題や個別の実証研究を巡って議論と交流を深めてきた。新型コロナウイルス流行下では対話を継続すべく、3 回のオンライン開催を試みた。前回の第 8 回（2023 年）では 3 年ぶりに対面型で開催（オンラインとのハイブリッド形式）することができ、対面での対話の重要性を再確認した。

第 9 回目となる今回も対面型で開催し、来られない人はオンラインで参加する。日中韓 1 本ずつ、計 3 本の論文発表と討論を行う。

なお、今回も円滑な対話を進めるため、日本語⇄中国語、日本語⇄韓国語、中国語⇄韓国語の同時通訳をつける。フォーラム終了後は講演録（SGRA レポート）を作成し、参加者によるエッセイ等をメールマガジン等で広く社会に発信する。

■ 開催趣旨

「国史たちの対話」企画は、日中韓「国史」研究者の交流を深めることによって、知のプラットフォームを構築し、三国間に存在する歴史認識問題の克服に知恵を提供することを目的に対話を重ねてきた。第 1 回で日中韓各国の国史研究と歴史教育の状況を確認することからスタートし、その後 13 世紀から時代を下りながらテーマを設け、対話を深めてきた。新型コロナ下でもオンラインでの対話を実施し、その特性を考慮して、歴史学を取り巻くタイムリーなテーマを取り上げてきた。

昨年是对面型での再開が可能となったことを受け、「国史たちの対話」企画当時から構想されていた、20 世紀の戦争と植民地支配をめぐる国民の歴史認識をテーマに掲げた。多様な切り口から豊かな対話がなされ、「国史たちの対話」企画の目標の一つが達成された。今後はこれまでの対話で培った日中韓の国史研究者のネットワークをいかに発展させていくか、またそのためにどのような方針で対話を継続していくかが課題となるだろう。

こうした新たな段階を迎えて、第 9 回となる今回は、開催地にちなみ、「東南アジア」と各国の国史の関係をテーマとして掲げた。日本・中国・韓国における国史研究は、過去から現在に至るまで、なぜ、どのように、東南アジアに注目してきたのだろうか。過去の様々な段階で、様々な政治、経済、文化における交流や「進出」があった。それらは政府間の関係であったり、それにとどまらない人やモノの移動であったりもした。こうし

た諸関係や、それらへの関心のあり方は、各国ではかなり事情が異なってきた。こうした直接・間接の関係の解明に加え、比較的条件に近い事例として、自国の歩みとの比較も行われてきた。そもそも「東南アジア」という枠組み自体も、国民国家や「東アジア」といった枠組みと同様、世界の激動のなかで生み出されたものであり、歴史学の考察対象となってきた。

本シンポジウムでは、各国の気鋭の論者により、過去の研究動向と最先端の成果が紹介される。これらの研究は、どのような社会的・歴史的な背景のもとで進められてきたのか。こうした手法・視座を用いることで、自国史にいかなる影響があり、また今後はどのような展望が描かれるのか。議論と対話を通じて3カ国の国史の対話を、より多元的な文脈のうちに位置づけ、さらに開いたものとし、発展の方向性をも考える機会としたい。

■ プログラム

※基調講演 40-50分、発表 20分

2024年8月9日(金)				
到着(19:00頃~歓迎会)				
2024年8月10日(土)				
円卓会議のひとつとして：国史対話第1セッション(9:00-10:30) 司会：劉傑(早稲田大学)				
開会挨拶	三谷博	MITANI Hiroshi	東京大学 名誉教授	
基調講演	楊奎松	YANG Kuisong	北京大 学・華東 師範大学	ポストコロニアル時代における「ナショナリズム」衝突の原因—毛沢東時代の領土紛争に関する戦略の変化を手掛かりに
質疑応答				
休憩(10:30-11:00)				
円卓会議のひとつとして：国史対話第2セッション(11:00-12:30) 司会：南基正(ソウル大学)				
タイ	タンシンマ ンコン・パ ッタジット	Pattajit TANGSINM UNKONG	東京大学	「竹の外交論」における大国関係と小国意識
日本	吉田ますみ	YOSHIDA Masumi	三井文庫	日本近代史と東南アジア—1930年代の評価をめぐって—
韓国	尹大栄	YOUN Dae- yeong	ソウル 大学	韓国における東南アジア史研究
中国	高艶傑	GAO Yanjie	厦門大学	華僑問題と外交：1959年のインドネシア華人排斥に対する中国政府の対応
アジア未来会議開会式、基調講演とオープンフォーラム(16:45-18:15)				
アジア未来会議ウェルカムパーティー(18:30-)				

2024年8月11日(日)				
円卓会議のひとつとして：国史対話第3セッション(9:00-10:30) 司会：彭浩(大阪公立大学)				
指定討論と自由討論				
討論者：				
【韓国】		【日本】		【中国】
鄭 栽賢(木浦大学)		佐藤雄基(立教大学)		鄭 潔西(温州大学)
韓 成敏(高麗大学)		平山昇(神奈川大学)		鄭 成(兵庫県立大学)
休憩(10:30-11:00)				
円卓会議のひとつとして：国史対話第4セッション(11:00-12:30) 司会：鄭淳一(高麗大学)				
自由討論				
討論まとめ	劉傑	LIU Jie	早稲田大学	
昼休憩(12:30-14:00)				
円卓会議のひとつとして：国史対話第5セッション(14:00-15:30) 司会：塩出浩之(京都大学)				
国史対話のこれから				
閉会挨拶	宋志勇	SONG Zhiyong	南開大学	
アジア未来会議分科会、グループセッション(若手研究者の論文発表)(16:00-17:30)				
アジア未来会議クロージングパーティー(18:00～)				
2024年8月12日(月)				
スタディーツアー(任意)				
2024年8月13日(火)				
出発				

■「国史たちの対話」プロジェクト

渥美国際交流財団は2015年7月に第49回SGRA(関口グローバル研究会)フォーラムを開催し、「東アジアの公共財」及び「東アジア市民社会」の可能性について議論した。そのなかで、まず東アジアに「知の共有空間」あるいは「知のプラットフォーム」を構築し、そこから和解につながる知恵を東アジアに提供することの意義を確認した。

このプラットフォームに「国史たちの対話」のコーナーを設置したのは2016年9月の第3回アジア未来会議の機会に開催された第1回「国史たちの対話」であった。それまでも3カ国の研究者の間ではさまざまな対話が行われてきたが、各国の歴史認識を左右する「国史研究者」同士の対話はまだ深められていない、という意識から、まず東アジアにおける歴史対話を可能にする条件を探った。具体的には、三谷博先生(東京大学名誉教授)、葛兆光先生(復旦大学教授)、趙珖先生(高麗大学名誉教授)の講演により、3カ国のそれぞれの「国史」の中でアジアの出来事がどのように扱われているかを検討した。

第2回対話は、自国史と国際関係をより構造的に理解するために「蒙古襲来と13世紀モンゴル帝国のグローバル化」というテーマを設定した。2017年8月、北九州に日本・中国・韓国・モンゴルから11名の国史研究者が集まり、各国の国史の視点からの研究発表の後、東アジアの歴史という視点から、朝貢冊封の問題、モンゴル史と中国史の問題、資料の扱い方等について活発な議論が行われた。この会議の諸発表は、東アジア全体の動きに注目すると国際関係だけでなく、個別の国と社会をより深く理解する手掛りも示すことを明らかにした。

第3回対話はさらに時代を進めて「17世紀東アジアの国際関係」と設定した。2018年8月、ソウルに日本・中国・韓国から9名の国史研究者が集まり、日本の豊臣秀吉と満洲のホンタイジによる各2度の朝鮮侵攻と、その背景にある銀貿易を主軸とする緊密な経済関係、戦乱の後の安定について検討した。また、3回の国史対話を振り返って次につなげるため、早稲田大学主催による「和解に向けた歴史家共同研究ネットワークの検証」のパネルディスカッションを開催した。

第4回対話は「『東アジア』の誕生—19世紀における国際秩序の転換—」というテーマで、2020年1月にフィリピンのマニラ市近郊に日本・中国・韓国から国史研究者が集まり、各国の「西洋への認識」「伝統への挑戦と創造」「国境を越えた人の移動」について論文発表と活発な討論を行った。

第5回対話は「19世紀東アジアにおける感染症の流行と社会的対応」というテーマで、コロナ下の2021年1月に完全オンライン形式で開催され、19世紀に感染症の問題を各国がどのように認識し、いかに対応策を用意したかを見て、さらに各国の相互協力とその限界について考えた。各国からの論文発表に加え、過去4回の参加者がパネリストとして多数参加し、活発な討論を行った。やむを得ずオンライン開催となったものの、結果としてはZoomウェビナーというプラットフォームを得ることとなり、新たな展開につながる有意義な対話となった。

第6回対話は、アジア近現代の「人の移動と境界・権力・民族」をテーマとして、第5回に引き続きオンライン（3言語同時通訳）で行われた。塩出浩之先生（京都大学教授）は問題提起で、近現代における人の移動を左右してきた国境に焦点を当て、人の移動が国家主権体制や国際政治構造（帝国主義や冷戦）と密接にかかわる点を指摘した。その後のセッションでも議論が白熱した。やや実験的に自由討論を主体に一日を費やした構成であったが、活発な議論を進めることができたと高く評価された。

第7回対話は、2022年8月に「『歴史大衆化』と東アジアの歴史学」をテーマにオンラインで開催された。韓成敏先生（高麗大学研究教授）が日ごろ韓国の歴史学者の中で議論している「歴史大衆化」問題を提起され、危機的状況にある歴史学の状況を分析、ひとつの解決方法として「パブリック・ヒストリー」を提案した。その後各国の異なる状況を踏まえて「歴史の大衆化」を多角的に検討する活発な議論が交わされた。

第8回対話は、2023年8月に「20世紀の戦争・植民地支配と和解はどのように語られてきたのか——教育・メディア・研究」をテーマに対面とオンラインのハイブリッド形式で開催された。3年ぶりの対面型開催となった第8回では従来と同じく日中韓3本ずつ、計9本の論文発表と討論という構成に戻り、「教育」、「メディア」、「研究」のサブテーマごとに日中韓から1名ずつの発表があった。2日目には指定討論と全体討論が行われた。オンライン開催の性質上、討論時間が十分に取れない状況が続いたが、今回は第4回までと同様に2日間にわたり開催され、討論時間も十分に確保することができ、有意義な議論につながったと評価された。各国が直面している現状とその背景からもたらされる課題が発表を通じて明らかになり、討論では様々な意見や提案が示された。

本プロジェクトは、フォーラム、セッションでの対話だけでなく、3言語に対応したレポートの配布とリレーエッセイのメールマガジン等により、円卓会議参加者のネットワーク化を図ることを目的としてスタートした。8年にわたる蓄積から、日本・中国・韓国の各国の国史研究者400人を超すネットワークとして成長している。

■ 国史たちの対話レポートのバックナンバー

第1回国史対話レポート「日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性」

<http://www.aisf.or.jp/sgra/active/report/2017/8730/>

第2回国史対話レポート「蒙古襲来と13世紀モンゴル帝国のグローバル化」

<http://www.aisf.or.jp/sgra/active/report/2017/10611/>

第3回国史対話レポート「17世紀東アジアの国際関係—戦乱から安定へ」

<http://www.aisf.or.jp/sgra/active/report/2018/14261/>

第4回国史対話レポート「『東アジア』の誕生—19世紀における国際秩序の転換—」

<http://www.aisf.or.jp/sgra/active/report/2020/15991/>

第5回国史対話レポート「19世紀東アジアにおける感染症の流行と社会的対応」

<http://www.aisf.or.jp/sgra/active/report/2021/17058/>

第6回国史対話レポート「人の移動と境界・権力・民族」

<https://www.aisf.or.jp/sgra/active/report/2022/17575/>

第7回国史対話レポート「『歴史大衆化』と東アジアの歴史学」

<https://www.aisf.or.jp/sgra/active/report/2023/18258/>

第8回国史対話レポート「20世紀の戦争・植民地支配と和解はどのように語られてきたのか—教育・メディア・研究」

<https://www.aisf.or.jp/sgra/active/report/2024/19303/>

■ メールマガジンのバックナンバー

<https://www.aisf.or.jp/kokushi/index.html>